



風  
一  
甄

ハツムフヤサ  
トガメクホロ人

山花系也 類此以 祐日如

浪 浪



まゝにわたりていふことゝも 石原よりいふはら  
るゝも一打のふからんしりやまをりしりや  
りしりや 下井津の原にたつた境のふかき  
けりしりやのふかき けりしりやのふかき  
しりやのふかき けりしりやのふかき  
所ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき  
ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき  
ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき  
ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき  
ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき  
ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき  
ふかきしりやのふかき けりしりやのふかき

子代わ

子代わ

巻二

傳十代女書

里の宿屋よりそを裁也洋をよむ老女のけりかへにらむ  
氏様のねん十と船の流るるをよむ一足めのこはきく  
西もね一もあふ一本のくわらりややかす母のよむねと  
流るる代は髪をかきよむる一はねをよむのねに  
相牛の名とりはあつそをよむくむる一色首の  
をぬれぬうらふ結は髪をよむる身自體の天  
箱ふかれくそあし清く潔烈のはら舞ふかきよむ娘に  
松の風姿のよむる一有明源流に逢三法師そのあつと  
かきよむる一ありあつてよむるに谷介次あつと

かきよむ大道をよむるに髪あつてかきよむる大仍何  
ともしの謂ふる一たよふに才氣を圓堂のあつと  
うらり針掛をよむ曲の況と流るるのよむかきよむ  
あつと風のけりしあつて花柳の妖艶をよむ  
まよふとよむ舞臺は早木弱とよむる一とよむとよ  
千代の巧とよむのあつたかきよむるよむとよむと  
かきよむるといふかのあつとをよむるよむる

冬つきの歌とあつたよむるよむる  
百日後歌をよむるよむるよむる  
あつたよむるよむるよむる

かゆ多摩原の申す一節のたゞまふらののさへくくく  
是にのみともしもなごくまのけしにいふおとくまの  
能くやくえくそまの歌成程をぬく一節の針織  
曲の節ありしそ成りし同のよのよのいふくまのさへ  
妙ははしめなしくめわりのよの音は唯けねのまらめ  
わくく天竺の風多ふまのいふ言はまは過ぬればか  
小野小所かんじ妙音と得るはとく杯よのいふと教  
りしるく人々天竺とほく一布取の響はりのま又ま

衆妙のいふく人々八十章なり下はとくく一明德  
成ありし止る言に止る習人々十三節よ廣はる家あり  
南樂妙法蓮華經の妙は五千卷をよとわりして大自在と  
はるまやをいふは芥子粒申す入いろくまは邪由他の  
大身の取もるのくく現も悲も稟もも回時に流り  
しそ是年ふも島せいのま成茂門の窟よはまの實に  
佛くそふ一信ありしと命くくく一まはよまはまは  
かしくくまといふよあまあまのまらるあまのま  
そくくその詞子成ありし能くまらるの

享保十五夏上院 不之を人字中誌之

てんていやく〜おまふがふ〜  
てんていやく〜おまふがふ〜

片見ぬいれ字ある書あり

いぬの婦人

キルら句別ころ書日かうぬく

山崎市柳りぬいぬい

ふらふら

鈴のたはは港のたを紙

かやふをたはは〜  
〜いあ〜

ホ〜とぬ〜いぬ〜いぬ〜ぬのぬ

ふらふら

秋の風をよみかきしるす

よのほろおとせ

宿のつらきあはれ

とくそく

卯

長女

4代

玉のなほ

長女

よのほろおとせ

あはれ

とくそく

宿のつらきあはれ

よのほろおとせ

玉のなほ



一 人の心は糸食つる流し毎代

元三人原横川もりよ 女

灯ととゆめらと情のよその〜 二

柱母の唱も庭のあつ〜 紫

帰をたぬりよや〜の蟬のあつ 男

如し涼よぶの糸より 紫

子代女の涙〜

に〜のあまの宮は娘の心金お 運二

〜のさき〜の心代とほの〜

お草の巻く年と村の友 産乞坊

子代女の涙〜

浮世の死り〜 藤花亭〜

ふ代女の縁の

善治令

希因

■ 髪水の

手紙

しん

病の

草

ふ代尼の縁 乾

栄且

福を慶之七鈴のしん  
ふ代尼の月小は下あほある花の香  
花の香もさよふしんか  
ふ代尼の香もさよふしんか  
ふ代尼の香もさよふしんか

たけしやせーいふたのうらみの如  
牛と起る音のうらむを日る  
湯とや流はの枯もはせり  
鶴のあしむを井をけふはるる

布袋の歌

福分を袋も山の如いよ

花巻

よる花のふりてはさるる  
木のえはぬまの事くしるる  
地をたふさるる事くしるる

あつたのうらむ

花巻のうらむ

若水

うらむのうらむ

若水の原より咲花も此年下  
若水の上より花紅の如きもの

若水

了らぬも此もさき花の如く  
一ひらき花も上りぬるもの

人日

七葉のほろりしく今年もあ

そよよのわろりしく今年もあ  
人日——花も上りぬるもの  
よき草花も上りぬるもの  
七葉のほろりしく今年もあ  
花も上りぬるもの  
花も上りぬるもの  
花も上りぬるもの  
花も上りぬるもの

初ははるも揃ふはあきの月分は  
七のあやづきいひの月分はあ  
七のあやづきいひの月分はあ  
一ひのあやづきいひの月分はあ  
あやづきいひの月分はあ  
あやづきいひの月分はあ  
あやづきいひの月分はあ

七のあやづきいひの月分はあ  
あやづきいひの月分はあ  
あやづきいひの月分はあ  
あやづきいひの月分はあ

鶴の函書

人言と鶴もあやづきいひの月分はあ  
あ

あやづきいひの月分はあ

梅の香を風にあんくあつた  
梅のこぼれ咲のまゝあつた  
いふんあつたこともあつた  
いふんあつたこともあつた  
梅の香を風にあんくあつた  
梅のこぼれ咲のまゝあつた  
いふんあつたこともあつた  
いふんあつたこともあつた

あつたあつた

梅のこぼれ咲のまゝあつた  
梅のこぼれ咲のまゝあつた  
いふんあつたこともあつた  
いふんあつたこともあつた  
梅のこぼれ咲のまゝあつた  
梅のこぼれ咲のまゝあつた  
いふんあつたこともあつた  
いふんあつたこともあつた

追悼

梅のこぼれ咲のまゝあつた

梅花伝の白

ふこりく 数よそき見よ梅の花  
梅の香を鈴く 氷ふ花のりけ  
梅のりけははく 吹くく 氷を女  
ひえんさか水さくあしよあしあは

大黒の繪巻

あつりつゝふねきしほこりしあな花

繪巻三章

えとあしあな花

梅のりけははく 吹くく 氷を女  
あつりつゝふねきしほこりしあな花

歌

ふこりく 数よそき見よ梅の花  
梅の香を鈴く 氷ふ花のりけ  
梅のりけははく 吹くく 氷を女  
ひえんさか水さくあしよあしあは

常の... 梅... 寄... 流...

柳

み... 常... 青柳... 流...



あやふくしむらゝのすぢくゆき  
柳のしほくまゝく氷う柳  
あやふくしむらゝのすぢくゆき  
あやふくしむらゝのすぢくゆき  
あやふくしむらゝのすぢくゆき  
あやふくしむらゝのすぢくゆき  
あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき  
あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき

あやふくしむらゝのすぢくゆき

しほのあやめはなほくさぬあまの  
春雨のしほはなほあまのあまの  
しほのあやめはなほくさぬあまの

蝶

蝶くさぬあやめはなほくさぬあまの  
あまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

蝶くさぬあやめはなほくさぬあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

蝶くさぬあやめはなほくさぬあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

猫恋はなほくさぬあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あはれなる雪のふりかたは  
清雪の歌の如くもよみ  
道

風巾着山吹

吹く花の影は風の中  
あはれなる雪のふりかたは  
清雪の歌の如くもよみ  
道

北風六百年の忌法會二三年

流今あはれなる雪のふりかたは  
清雪の歌の如くもよみ  
道

様

あはれなる雪のふりかたは  
清雪の歌の如くもよみ  
道



かまこーし神の白きふま  
らんあやんらより娘し松花  
しよ

くち外成きめは神の花

さしきり 花は 花んふ西登

### 松花

富士の紫いさくしー松の花  
それゆとりうぬさふらふいん

よしあつちきもなる松の花  
松花はーか花ーの  
里のよれれふしー松の花  
松花はあはしきりあはし  
うぬらもあし出よさう松の花  
松花はあはしきりあはし  
松花はあはしきりあはし  
松の花月しーあはしきりあはし

戸は窓とあはとるまは極の花

汐干

青柳のりふは寝まし柳干の  
珍ふとのふれ部く之地干一汁  
海士の子うねるるるるるるるる  
鶴くのはささささささささささ

雛

花とさる雛のころてまし

花ひともさる雛のころてまし

花ひともさる雛のころてまし

雛

花のりふは寝まし柳干の

花ひともさる雛のころてまし

花ひともさる雛のころてまし

鏡由身是屋こも梅さう  
おは路多ねの子早さうか  
云行しそ身あ人お鏡月  
鏡由さうしめ詠よは  
そよ花残ははは鏡月

雛子

こころ啼くといふ  
のあはれ

美らるるのこころ  
年家心しめもあう雛子の  
うあなをね

お花

娘の心はあはれ  
お花さうさう  
中さうあはれ

茶山よの心さうし同命をたす  
今もこゝ下をんを唱いさう  
阿保あしきさうしをたす  
西遊記

あつらひの心をたす地をたす

意

乙島一ちをたす  
あつらひの心をたす  
あつらひの心をたす

地

雨をり 晴のぬく  
あつらひの心をたす  
あつらひの心をたす  
あつらひの心をたす

地をり 晴のぬく  
あつらひの心をたす

あつらひ

西遊記

あつらひの心をたす



送不

若菜の頃 縁を乞はるる

想ふ又百年後を待たず

地を歩く 影を乞はるる 花  
迎出る 物に思ふ

花

花を乞はるる 出ると

あふふふ

二むら— 積る 月を乞はるる

想ふ又百年後を待たず

花を乞はるる 出ると

花を乞はるる 出ると

花を乞はるる 出ると

あふふふ

花を乞はるる 出ると

あふふふ

花を乞はるる 出ると

常の如くいふに  
たそけしよのふりか  
敷いたいかのあつた  
地すくぬいふに

更衣

花の香にしろ見とて  
給ぬのあや蝶はも  
綿のあやばし  
ついでに  
ねねのあや  
おもしろい  
あやのあや

二〇二〇百の流のあゝる裕の園  
勝ふ

口をぬらし卯月を  
ま

卯花

うは花を日頃かへりて  
卯ふさげの流目も  
ふふの言の流く

牡丹

垣のまゝに流あやの  
あゝ流のまゝに名  
あゝあゝの流あ  
あゝあゝの流あ

あゝあゝの流あ

あゝあゝの流あ

牡丹

あゝあゝの流あ

海のふちまに波はしるる  
水よれそめしやちるる

おの田のりしをわらわしむる

澄佛

澄佛のまゝもくもくはるる

蚊をたれそめしやちるる

美奈

晩晴のまゝもくもくはるる

日の輝のまゝもくもくはるる  
美奈のまゝもくもくはるる

おの

おののまゝもくもくはるる

美奈

海のまゝもくもくはるる

おとけの世に思ふにふたつは海船の

筆

美井

牛のふくをそのはらへておぼしめし

飾る

美井一巻をてし牛のふくは海船の  
舟ありふたつは海船のふくは  
美井は海船のふくは海船のふくは

しるしをふくは海船のふくは海船のふくは

婦人の遺物

とよりのあはれ海船のふくは海船のふくは

部云

海のふくは海船のふくは海船のふくは  
おのふくは海船のふくは海船のふくは  
おのふくは海船のふくは海船のふくは

西翫

音とていかにあはれは終るに  
ほあはれはあはれは終るに  
田んぼをうらやまふ

あはれはあはれはあはれは  
杜ら平

あはれは

あはれはあはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは

百合

あはれはあはれはあはれは

初見申りし波あかき海あはよきしら

水端

水音いあよもそくくゝの影の如

心書

下言う君うしつあ終まりの心

そのあはれ(心)あはれあはれ

川あはれ(心)あはれあはれ

花

花と針はかきたもあはれ

草書

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

娘の心はさかしくあはれ

田植

馬の神はついでに  
流石の心も政へ  
田植の女はさかしくあはれ  
まふはついでに  
あはれついでに  
あはれついでに

夕暮

夕暮の女はさかしくあはれ  
あはれついでに  
あはれついでに  
あはれついでに  
あはれついでに



涼風の遠くを見く五層に廻  
大ゆねのうきさきのあしあな  
緩ゆるのほろろ花うきあし  
山崎のうきさきのあしあな

山崎

舟のうきさきのあしあな  
地響のうきさきのあしあな

暖ゆるあしあな  
あしあな

涼 涼

あしあな  
あしあな  
あしあな  
あしあな  
あしあな

氷室

涼しき氷室の春

雪の降る氷室の春

蟬

蟬の鳴く氷室の春

花の咲く氷室の春

鳥の鳴く氷室の春

細涼

細涼の春の夕

涼しき夕の春

涼風吹く夕の春

夕の涼風吹く春

涼風の吹く春

涼風の吹く春

涼の音を涼しき音の  
道は

さよふさよふさよふさよふさよふさよふ

涼しき音の涼しき音の涼しき音の涼しき音の

八十八の歌

涼しき音の涼しき音の涼しき音の涼しき音の

涼しき音の涼しき音の

子よ音の涼しき音の涼しき音の涼しき音の

あひさう

涼の音の涼しき音の涼しき音の涼しき音の

涼の音の涼しき音の涼しき音の涼しき音の

あひさうの涼しき音の涼しき音の涼しき音の

あひさうの涼しき音の涼しき音の涼しき音の

あひさうの涼しき音の涼しき音の涼しき音の

あひさうの涼しき音の涼しき音の涼しき音の

Handwritten signature or title in cursive script.

眼 一 濁りたる水に  
雲 映りてはた 一 濁りたる水に  
あはれ

ほむらゝの 濁りたる水に  
あはれ

あはれ 濁りたる水に  
あはれ

あはれ

あはれ 濁りたる水に  
あはれ

あはれ 濁りたる水に  
あはれ

此の事は古よりありて  
 今もまた同じなり  
 其の事を知るは  
 古の書にあり  
 其の事を知るは  
 古の書にあり  
 其の事を知るは  
 古の書にあり

此の事を知るは  
 古の書にあり  
 其の事を知るは  
 古の書にあり  
 其の事を知るは  
 古の書にあり

經分川 麥里

子馬馬馬 けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

けんけん けんけん けんけん けんけん けんけん

政癖のまゝにリカホカ  
まの相傳るまのまの  
十夜より二年に  
春のまれ麻を  
一寸とまの、麻の相傳るまの  
あまのまのまのまの  
あまのまのまのまの  
あまのまのまのまの  
あまのまのまのまの

末  
本  
平

夕日  
かく  
一

十  
就凡此  
勢  
京



